

探求・川にちなんだ万葉集の歌

第95回

万葉の川心

元横浜市立子安小学校 教諭

澤井園子

上古磨の歌

(巻第三 二五六番歌)

今日もかも 明日香の川の 夕さらさず

河蛙鳴く瀬の 清けかるらむ

幼少の頃に、たった三年しか暮らしていなかった土地を五十年ぶりに訪ねてみることにした。家があった場所、通った小学校、毎日遊んだ公園が、今はどうなっているだろう。そういえば、ほとんどのことを忘れている九十歳を超えた母が、毎日のように懐かしく話すのは、疾うの昔に離れた故郷のことだ。昭和初期に長女として生まれ、家の手伝いばかりで苦労したにも関わらず、今もなお記憶の奥底に強烈に刻まれる理由も分かるかもしれない。早速行き方を調べるべく地図を開いた。

この歌は、奈良に都が遷された後、故郷の飛鳥を思って作られたと考えられている。作者「上古磨」の出自は不明であるが、村主という百済系渡来人と言われ、万葉集にはこの作者の歌が一首選ばれている。万葉の昔から歌に詠まれる明日香川は里川である。川を飛び石で渡っては妻のところに行き、川藻のなびきに恋心を重ねる。雨が降れば昨日までの浅みが深みになるのは、まさに人の世のようだ。荒々しさも含め、風土のなくてはならないひとつとして川はそこに在る。

河蛙はカジカガエルとされ、清流に棲み、初夏から秋にかけて雄のみが高く澄んだ声で鳴く。その音は川のせせらぎにも消されることなく、二百メートル以上も届くという。千鳥と同様に川の景・秋の景として定着し、その美しさは人々の



奈良県高市郡明日香村飛鳥 甘樫橋東にて

心の琴線にふれていく。「清けし」は清らかに澄んでいる様をいい、音にも景色にも使われる。川の水音、月の輝き、山川の景観、それらから受けるさわやかで心地よい情感をも丸ごと表す言葉であり、その土地をほめる言葉としても相応しい。「今日もまた、あの明日香川の、夕べにはきまつて河蛙の鳴く瀬は、清らかであることだろうなあ。」故郷の景色は、切り取られた一ページではなく、身体ごと感覚のすべてで享受した空間であり、人生の舞台だったのかもしれない。知識よりも感覚と感情で生きていたあの日々こそが、記憶の奥底で生き続けていると教えられる。川は瞬間で景色や音色を変えながら、人の心をつかみ、時代を経て、絶えずそこに流れて人を癒やす。そして、その輝きが誰かによって言の葉として紡がれて、土地の人に愛され、歌われていく。時を超え国を超えて人の心を揺らし、命のつながりのように次の世代に歌い継がれていく。明日香(飛鳥)川は、奈良県明日香地方を流れる川で、奈良県高市郡の高取山を源として大和川に入る。写真の歌碑は、奈良県高市郡明日香村飛鳥甘樫橋の東にある。

故郷を訪ねてみると、行きたい場所の一つひとつに思い出があった。忘れていたことが次々とよみがえってはまた消えていった。五十年来の幼なじみが一緒に歩いてくれた。会えたことがあまりにうれしくて、お茶でも味噌汁でも乾杯した。おなかの底から笑った。歌ったこと、遊んだこと、あの日の自分にまた会えた気がした。